特定非営利活動法人 マザーハウス会報（2015 年 1月15 日創刊）

マザーハウス たより

Mother House

あなたは愛されるため、また、愛するために生まれてきたのです。

あなたが必要であり、大切です。マザーハウスはあなたの家族です。

2017 2 February
No.26

このマザーハウスたよりは、公益財団法人日工組社会安全研究財団の助成より作成したものです。

たより2月号 目次

●2　理事長挨拶
●3　Ｉ・Ｍさんの証
●7　塀の中のたより
●１３　風の配達する手紙
●１３　育児日記
●１４　ささきみつおコーナー
●１５　立命館大学
　　講演後アンケート
●１９　行事予定
●１９　編集後記

《今月のイラスト》

＊Ｔ刑Ｙ・Ｔさん…表紙
＊彰流さん…p.4 左 /7/8/12
＊Ｔ刑Ｆ・Ｋさん…p.5
＊死刑囚…p.4 右 /6/9
＊ you すず me さん…p.19

理事長挨拶

厳しい寒さが続いておりますが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。風邪など引かないように、十分、気をつけてください。

新しい年を迎え、私が司教・司祭およびキリスト教会に感じたことを書かせていただきます。心の内を正直に話すことで批判される方も多いと思いますが、敢えて言わせていただきます。

昨年、教会で 2 歳の子どもがうるさくしたことで、男性信徒の方から叱責を受けました。幼子を受け入れられない教会が、罪人の頭である大人を受け入れられるのでしょうか。社会復帰した元受刑者たちを受け入れられるのでしょうか。私は疑問に感じましたし、キリストだったらどうするだろうかと思いました。

教皇フランシスコのメッセージが、日本の司教・司祭および教会に響かないのは何故なのでしょうか。教皇になられてから、受刑者のためにキリストを実践している姿を様々な場面で拝見しますが、皆さんはどう感じていますか。

ミサの説教などで素晴らしいことが話されていますが、私には響かないことがあります。言葉だけではなく、本当に実践しているのかなと感じるからです。あれだけ教皇が「受刑者のために」とおっしゃっていたのに、昨年、受刑者のためにイベントをしたのは、司教不在の「さいたま教区」だけでした。

このことからも、よく分かります。キリストを実践している教会ならば、教皇が言われたことを真摯に受け止め、実践すると思います。一般の企業でも、トップが言ったことに対して、役員やスタッフは実践すると思います。

キリストをブランドにしていても意味が無いと思います。

私は大学などで話をさせていただいていますが、多くの学生が、「今の教会に行こうとは思わないし、クリスチャンになりたいと思わない」と言います。そして教会には、子どもたちがあまりいません。どうしてなのでしょうか。

家族の問題やいじめ、孤独な子どもたちが多くいます。淋しく自分を見失っている子どもが多いのです。キリストの愛を実践している教会なら、多くの子どもが集まるのではないでしょうか。

犯罪をする人も、同じ人間です。皆さんと同じように、社会の中で生活していた同じ人間なのです。彼らは刑期が終了したら、この社会に帰ってくるのです。彼らの回復には、キリストの愛と赦しと、共に受け入れてくれる場所が必要です。キリスト教会が、進んでそういった場所になるべきではないでしょうか。

教皇も、「教会はベビーシッターではなく、母となりなさい」とおっしゃっています。そのことを司教や司祭が理解し、率先して実践するべきだと私は思います。カトリックのトップである教皇フランシスコが言っておられ、実践しているのです。

現在、マザーハウスでは、約 700 名の受刑者と関わっています。また、社会復帰した元受刑者は 4 年間で 100 名以上いますが、地元に帰った人たちは再び犯罪をし、刑務所に戻っています。

しかし、マザーハウスとしっかりと関わり、正直に相談を繰り返してきた 40 名以上の人たちは、回復の道を歩んでいます。そしてキリストと出逢い、私を含め 6 名が受洗し、他に 6 名が教会に通い、神父さんと交わりをもっています。社会で生きていくのは厳しいですが、友がいることが大きな力になります。

受刑者の皆さんに言いたいことがあります。**文通は、女性との出逢いを求める場ではありません。未だに「女性を紹介してほしい」と書いてくる人がいます。当法人は回復のための文通を実施しており、そのような申し込みは一切お断りいたします。**

また、文通者に様々なことを依頼する方がいますが、今後、そのような方は文通を中止させていただきます。

文通者に依頼することが無いように、事業部フランシスコを立ち上げたのです。フランシスコでは、ネット検索、中古書籍の購入等をしています。その他の依頼事等の相談も、フランシスコに手紙を出してください。費用がかかる内容でしたら、見積りをして書面をお送りいたします。

社会では、何か依頼事をする場合、必ず費用が発生します。無料で何かの依頼事ができるところは、私が知る範囲ではどこにもありません。そのことを十分、理解していただきたいです。当たり前のことができなければ、回復はできません。

先月、「回復プログラム」を受刑者の皆さんにお送りしましたが、実施していただけましたでしょうか。特に、マザーハウスに身元引受人をお願いした人たちからは、感想をいただきたいです。

このプログラムは、私の受刑中の体験に基づいたものであり、真剣に実施すれば、必ず犯罪からの離脱ができます。忍耐強く、何回も何回も、通しで行なってください。毎回、ノートに記入することで、変化がみられると思います。反省ではなく、このプログラムを実施して、悔い改めてください。

皆さまの上に神様の豊かな祝福がありますように。

マザーハウスでは、龍谷大学の教授とともに、APS(アフター・プリズン・サポート)研究会を発足しました。長期受刑者の回復のための研究も開始します。

さらに、マザーハウス・アドボカシー・コミッション(支援弁護団)も立ち上げる予定です。刑務所内の改革、社会復帰支援等を、司法関係者も含めて実施し、法的対応も検討する考えでいます。受刑者の皆さま一人ひとりのご協力をお願いいたします。

今後はマスコミ関係も含めて、積極的に発信していきたいと思います。

今年1月、神戸学院大学、東洋大学、青山学院大学、不二聖心女子学院で、学生たちとの触れ合いをいたしました。刑務所や社会復帰の現状を伝える中で、学生たちがとても考えてくださっていると感じ、大きな勇気をいただきました。

これからも、キリストに熱く燃える男として生きたいです。

I・Mさんの証

私は今日、とても不思議な気持ちでここに立っています。

7年前、私は主人のことを本当に熱心に祈っていたんです。

当時、主人は会社の上司でした。とても気さくで明るい彼に良い印象を持っていたので、「できれば近くで働きたいなあ」と思っていました。でも、私は彼を見ていて、あることに気づきました。

彼は薬物を使用していたのです。なぜ気づいたかというと、私も昔、覚せい剤を使用していたことがあるからです。やったことのある人は、やっている人が分かります。

ある日、薬物のことを彼に忠告する機会があり、思い切って「気をつけた方が良いです」と話してみました。すると、それをきっかけに、彼は色々なことを私に打ち明けてくれました。それで彼の人間性がもっと見えてきました。その時の主人は、今の主人と同じ、本当に心の優しい人でした。だから私、彼にそのまま生きてほしくなかったんです。

薬物使用の先にあるのは、「失うこと」であり、「破壊」です。

それまでの人生で築き上げてきた、大切な物事…人間関係での信頼や、仕事、お金、友達、家族、その他たくさんの大切なことを壊していきます。自分の手で、次から次へと壊していくんです。

そんな人生を彼に生きてほしくなかったから、神様にお祈りしました。

その後、彼と親しくなり、お付き合いが始まりました。やがて一緒に暮らすようになりましたが、あれほど「薬物をやめて幸せになってほしい」と願っていたのに、私自身も再び薬物に溺れてしまいました。

そして、一緒に暮らし始めて2年経った頃の、ある日の朝7時です。突然、警察が家に来ました。そのまま彼は逮捕され、連行されていったのです。そして、主人との2年の別れとなりました。その2週間後、私にも逮捕状が出され、私も連行され、留置所に連れていかれました。

身体検査をされた後、6 畳ほどの大きさの檻に、他の被疑者と 3 人で入れられました。その中で、裁判が終わるまでの 2 ヶ月間を過ごすことになりました。

本当に後悔しました。自分が情けなくて情けなくて、恥ずかしくて仕方なかったです。本当に屈辱的でしたが、「これが自分の姿なんだ」と、知りました。

何より、主人との別れが悲しくて悲しくて…死ぬほどでした。もう、声を聞くことさえできないで、彼もまた隔離され、この世にいないように思えるほど、遠く、離ればなれになってしまいました。今、彼は私と同じように、惨めに檻の中にいるのです。

そこへ、とんでもない恐怖が襲ってきました。

突然、世の中から隔離されたので、普通の生活で必要なことができなくなったのです。留置所にいても毎日は過ぎてゆくのに、家賃や光熱費の支払い、ローンの返済など…生活に必要な、今までは当たり前にしていたことが、何もできなくなったんです。

それどころか、逮捕される直前に、働いていた会社を半ば強引に慌てて辞めてきたので、給料が振り込まれていなかったんです。また、家族に助けを求めていましたが、見限られ、ずっと音信不通のままでした。本当に怖くて、震えがきました。

私は初犯なので、実刑になって刑務所に行くことが無いのは分かっていましたが、裁判が終わり、家に帰ったとしても、お金の全く無い日々が待っているのです。

最悪のケースなら、家に帰っていくらもしないうちに、もう家を出る準備をしないといけないんです。きっとその頃には、次の月の請求書も更に届くのですから…。完全に八方ふさがりでした。どん底とはこのことだと思いました。

主人に会いたかったです。怖くて、悲しくて、苦しくて仕方なかったです。主人と一緒に過ごした思い出のある家が無くなって、彼の帰る家が無くなるんです。とても、とても悲しかった…本当に、泣きました。悲しみが、涙が、心の底から溢れて、本当に、泣きました。

檻の中には他の人がいて、泣くと露骨に迷惑がられ、嫌な顔をされるので、トイレに入って泣くのですが、必死に声を殺して我慢しても…あんまりにも嗚咽が激しすぎて…。どんなに声を殺しても、地の底からのような「うめき」が、留置所内に響くんですね。

すると刑務官が来るんです。自殺防止のために、トイレから出るように言いに来るんです。

何にもできないんです。泣くこともできないんです。涙が止まらないのに、嗚咽が止まらないのに…この檻の中で、私は泣くことすらできない！

溜まった請求書を整理することも、家賃の支払いを待ってもらえるよう連絡することもできない。前の会社に給料を請求することもできない。誰かに助けを求めて電話することもできない。本当に、何一つ…何一つできないんです。今、私と主人の幸せが…人生が…手からこぼれ落ちていくのに…何一つ、できることは無いんです。

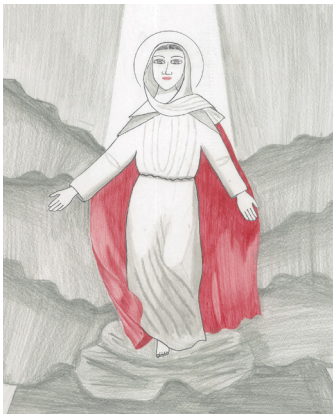
ただ、こぼれていくままに…見ているしかなかったんです。「絶望」とは、このことでした。涙が止まらなかったです。主人が、かわいそうで仕方なかったです。

絶望して、心が空っぽになりました。頭の中が、真っ白になりました。

どれくらい時間が経ったか…分かりませんが、激しい嗚咽が止まりました。全部が、すっからかんになりました。心も、頭も、すっからかんで…放心状態でした…ただ、空を見つめていたと思います。

…しばらくして、ふと…気がついたんです。「あ…私、一つだけできることがある…」。お祈りです。

私、急に思い出したんです！「そうだ！お祈りができる！祈りは、私が何かをするより、もっと強力で、もっと効果的なんだ！」って、思い出したんです。



その時、私の霊が「うわあ～！」と立ち上がったかんじでした。それで私は心の中で叫びました。「私は何もできないようで、何でもできる！私は弱いときにこそ強い！私は何も持っていないようで、何でも持っている！私は主を知っている！！」と。

その時から、私は泣くのをやめました。涙が出なくなったんです。嘆きは祈りに変わったんです。まさに地の底からの祈りでありました。私は、主のもとに帰りたかったのです。

それから毎日、朝から晩まで２ヶ月間、ずーっと聖書を読み、祈って過ごしました。

声に出せないので、心の中で賛美を歌いました。詩編を読みながら、ダビデに応えて「アーメンハレルヤ」と心で叫びました。預言者たち、使徒たちの説教を読み、「アーメン」と応え、礼拝しました。大きい声で叫んで主を褒めたたえたい時には、ノートに太い、大きな字で、褒めたたえる詩を書いて賛美しました。

そうやって留置所での一日一日が過ぎる中で、家賃の支払いや、その他の世の煩いは、不思議と一つ一つ解消されていきました。

そしてとうとう裁判が終わり、私は釈放されることとなりました。

家に帰った私は、ほっとしたと同時に、ここから戦いが始まりました。これから一人で、アルバイトの収入で家賃を払い、生活し、借金の返済をしていくのです。すごく怖かったです。

眠っているとき以外は、怖さで常に緊張していました。常に呼吸がハッハッハッとなっていて、洗顔やうがいが上手くできないほどでした。いつでも胸が苦しかったです。

貧困、恐怖、孤独が、常に私を襲い、家に帰ってからは毎日泣き通しで、主人からの、週に一度届くお手紙が私の一番の楽しみで、心の支えでした。常に祈り、聖書を読んでいないと、精神が本当に壊れてしまいそうでした。

それでも私は今日も生きていて、朝には目が覚め、一日が始まります。だから、なんとか一日一日を、乗り越えていくしかないのです。神様に、心の底からすがりました。

そうして毎日が過ぎ…いよいよ、持ち金が全て無くなりました。失業保険が入るのは、まだまだ先です。明日からは食べるものがありません。

でも私はこの時、不思議と心は落ち着いていたんです。ある意味、清々しいほど落ち着いていました。「まあ、なるようになるか…！」といったかんじでした。

そして、ダメ元で最後にもう一度、銀行の口座にお金が残っていないか、また、有効なカードローンが無いかを確認しに行こうと思って、夜だけど出掛けたんです。

ATMに着いて、カードを1枚1枚入れましたが、やっぱり残高はありません。それで、もう本当に清々した気持ちで最後のカードを入れました。暗証番号を押した、次の瞬間です！私の携帯が鳴りました。

私が電話に出ると、それはHさんという方でした。

Hさんは主人の友人で、主人が逮捕された時、勤めていた会社の社長でもあります。なので、今回のことでHさんには大変なご迷惑をお掛けしていましたが、主人の昔からの友人なので、私は留置所から帰ってすぐ、全て本当のことを打ち明け、お詫びのお手紙を送ったのでした。

電話に出ると、Hさんはこう言われました。

「先日はご丁寧なお手紙をありがとうございます。お元気そうで良かったです。それで、Mさんは今、仕事はどうしてるの？もし、まだ決まっていないなら、うちの会社が内装を請け負っている飲食店があるんだけど、そこが今、人手が足りなくて。新しい人が入っても辞め、入っても辞めして困っています。もし、Mさんが仕事が決まっていないなら、Mさんのような、ちゃんとした人に来てもらいたいんです。できれば明日からもう仕事に入ってほしいんです。それでお電話しました」と。

本当に驚きました！とっても嬉しかったです！

でも、あまりにもお金に困っているので週払いの仕事を探していることと、クリスチャンなので日曜日は働けないことをお話ししました。するとHさんは、「週払いと、日曜は休めるよう、自分から話しておく」と言ってくださいました。

私は、「週払い」「飲食店なのに日曜に休める」という条件に本当に驚きましたが、「明日から」ということに、もっと驚きました。

なぜなら、私はその時、失業保険の申請をしており、その「待機期間」といって、働いてはいけない期間が今日までで、明日から働いても良くなる日だったんです。ぴったりその日から、働けることになったんです。

とても偶然とは思えませんでした。1日たりとも無駄にならず、主が仕事を用意してくださったんです。私は探してもいないのに、仕事の方からやって来ました。

主のみわざに驚きながら、Hさんとの電話を切りました。

それで、ATMに最後のカードを入れて画面を見ると、最後のカードの利用残高は、0円でした。私はこれを見て思いました。「主は、私が残高0円を見る前に、次のドアを開いてくださった」。まさに1秒前に開いてくださったと、私の心に、はっきりと分かったのです。

また、Hさんが私のことを「Mさんのような、ちゃんとした人に来てもらいたい」と言ってくれたことにも、主のみわざを感じました。私がしたことを全て知っているにも関わらず、そう言ってくれたんです。

主は、もし人が悔い改め、へりくだるなら、完全な新しい道を備えてくださり、それまでのことは帳消しにしてくださるのです。何も無かったことにしてくださる上に、高く引き上げてくださるのです。本当に、主に感謝しました。

働いても働いても、お金は借金の返済に消えました。

はじめのうちは、主人に手紙を送りたいのに切手代の80円が無くて、ごはんを食べないで切手を買う日もありました。靴を買うお金が無くて、私の靴は底がはがれ、雨の日は両足びしゃびしゃでした。

月日が流れ、いよいよ残り1ヶ月もしないうちに主人が出所して家に帰ってくることになりました。

本当につらい日々でした。孤独と闘いながら、ただただ一生懸命働きました。一人で家をまもり、なんとか家計をまもり、一つ一つ問題をクリアし、やり切ったんです。

やっと…やっと2年が終わるので、幸せでした。

神様の御助けだけでここまで来ました。

本当に、困難だらけでした。困難続きの2年でしたが、主人は無事刑期を終え、家に帰ってきました。

社会復帰は通常、とても難しいですが、主人のことも、「信じるからね」と言ってHさんが紹介してくださり、スムーズに社会復帰できました。

店舗は違いますが、今、同じ会社で働いています。主人は55歳ですが、20代・30代の子が音を上げて辞めていく仕事をバリバリこなしています。主が健康を祝福してくださっているおかげです。

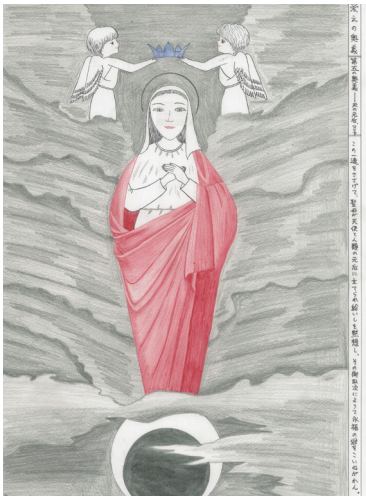
主人が刑務所から帰って、2年が経ちました。振り返れば、主人と出逢ってからのこの7年は、山あり、谷あり…色々ありました。

主人は今、落ち着いた、幸せな毎日を送っています。絶縁していた実家の家族との仲も、主が修復してくださいました。それに今では孫にも恵まれました。

私は、先生のある日のメッセージの言葉を思い出しました。「信仰生活の中で、み言葉に従い、神様にゆだねたとき、自分の中には無い、全く新しい物事が起きるようになる。自分では思いつきもしないことが起き、また、できるようになる」。

K教会のトラクトにも、そのメッセージが込められています。「新しい創造の恵みと聖霊の力」という言葉です。神様が新しく造ってくださいます。神様の霊が私たちの内にあるので、力が湧きます。私たちの心に希望を植えてくださいます。私たちが思いつきもしないような、素晴らしい希望をです。

本当に、神様に感謝します。そして、この小さな者に、主が何をしてくださったか証することを許し、支えてくださった主に感謝し、イエス・キリストの尊い御名によりお祈りします。アーメン。



塀の中のたより

＊無題の文章には題名をつけさせていただきました。
＊誌面の都合上、表現を変えたり、原文の一部を略した箇所がございます。
＊イニシャルは、苗字・名前の順です。

純真な気持ち

K 刑 I・K

ここで一つ俳句を書きます。

「よみがえる　サルビアの花　蜜の味」

子どもの頃、真っ赤な花を抜いては蜜を吸ったりしました。つつじの花の蜜もですが…。

たいしたことはできないのですが、私も何かのお役に立てればと考えています。素直な気持ちと突っぱねる気持ちがありますが、いつまでも純真な気持ちはもち続けていたいし、汚れ切っているこの心や気持ちも、いつかは洗い流される日が来ると思っています。

話は変わりますが、私は、10 月の運動会を盛り上げるための応援団の団長をやらせてもらっています。9月の初めからみんなの前に出て、応援の練習を6人の団員と同囚とで楽しくやっております。

人間関係について

K 刑　S・N

《 対人面での反省 》

私は人間関係がとても苦手です。自分の考え方でしか相手を見ることができずに、今まで多くの失敗・過ちを犯してきました。わがまま・傲慢な態度は、人間関係を築く上で良い結果を生まず、自分にとってマイナスにしかなりません。

日々の受刑生活、作業など、人と関わっていく上で、自分のことばかりでなく相手のことを尊重し、理解し、色々な見方・考え方があると思えるように、日々意識し、取り組むように努めていきたいと思います。そして、やり抜きたいと思います。そこから人間関係も良くなっていき、社会復帰する上で上手くいくと思うので、頑張りたいです。

《「挨拶」というコミュニケーション 》

さらに、人間関係で大切なのは、「挨拶」というコミュニケーションです。私は、舎房担当、夜勤担当、入浴・運動係と、日々、接する担当には挨拶をするよう心掛けております。私と接する担当の全員とはいきませんが、挨拶をできる関係であれば挨拶をします。そうすれば、担当も「おはよう」などと挨拶をしてくれますし、挨拶をされた側も挨拶をする側も、その日一日を気持ち良く過ごせると思います。

担当にも色々な人間がいます。しかめっ面をした担当もいれば、冗談を言ってくる担当もいますので、担当と上手く接していくのもコミュニケーションだと思います。

確かに、しかめっ面をして受刑者のミスばかり探している担当とか、受刑者を「お前」呼ばわりして明らかに喧嘩腰の担当などは、コミュニケーションが取れませんが、それまでのレベルと思い、私は相手にせず、自分自身が常に笑顔で生活するように心掛けて、日々の受刑生活を送っております。

Paix2　400 回記念コンサート レポート

T 刑　N・Y

《 ペペが来た！ 》

12 月 10 日、ペペによる刑務所慰問 400 回記念コンサートが行われた。前々回も 200 回記念で来ていて、どうもこの刑務所は、大きな節目か、良い所長さんに恵まれた時にしか来られない刑務所のようだ。

前回までのような、連行待機時間中のオリジナル BGM は流れず、黙想の号令ばかりがものものしい狭い方の体育館は、教育強制規定により、寒中、様々な病を抱えるお年寄りまで連行されて、まことに見栄え良く、満席となって開演した。

ペペはこの年、ミニアルバムをリリースした。その中から、「しあわせ」で私たちを祝福し、様々な困難、苦労の中でも音楽活動を続けられる喜びを、「歌いたい」で表現した。

ソプラノのまなみさんの方がどうしてもメインになりやすいが、コンサートでは必ず、めぐみさんがメインで歌うカバー曲が入る。前回は確か、最初の方で「宙船」を、MC 後に「とんぼ」を歌ったように思う。今回は、「SAY いっぱいをありがとう」の後だったと思うが、ウルフルズの「借金大王」が歌われた。ちょっと私たちにはシャレになっていない曲なのだが…。

《「元気出せよ」で… 》

「手を肩より上に挙げてはならない」。これは、曲目に「元気出せよ」が含まれるお約束を知りながら、刑務所側が事前に私たちに告知した事項である。

アーティストが「やりましょう」と呼びかけると、会場は凍りつく。私は腕で×をつくり、首を振って「今年はだめだ」と合図した。

「この場は私たちが仕切っていますからね。従わないと、指示違反になります」。以前と違い、刑務所ネタのトーク 1 つ 1 つが今年は全くシャレになっていない。

でも、どうやら周りの過半数以上がやろうとしている様子なので、私も腕を上げることにした。曲が始まってみれば、ほぼ全員、腕を上げていた。

一安心したのも束の間、「元気出せよ～」「ヨ～！」。奇声を発する者、発生。めぐみさんが「シー」の合図を出すも、今や遅し、一斉に緊張が走る。何しろ、全員参加行事のため、居室棟担当者含め、相当数が狭い会場で人垣をつくっているのだ。その威圧感は言葉ではあらわせない。

《 ものものしい警備こそが 差別を助長する 》

題名は忘れてしまったが、ふるさとの愛の歌を歌い、クロージングに、いつも通りに「逢えたらいいな」を歌って閉幕した。

受刑者の感想は、コンサートを聴いた回数によって変わっていた。

初めての人からは、「また来てほしい」という声が聞かれた。実際、音楽性は申し分ないのだが、受刑者処遇法施行当初の時代から聴いてきている人にとっては、回を追うごとに厳しく険しくなる会場の雰囲気に、身近な所内生活での先行き不安の方が募り、切実なのだろうと思う。

不自然な満席、つまり強制出席は、他施設でも常態化しているようだが、アーティストの良心に基づく芸術は強制されるべきものではないはずだ。刑務所も警察も、ものものしい警備を演じて見せるのが大好きだ。そうした警備の対象とされる人々への差別を、最も助長しているのは一体誰なのかが、よく分かる機会となった。

日本で「愛」を実践した人物

T刑 T・T

榊原亀三郎

《「べっ甲亀」》

《 救いやすい人を選んで救っているだけの活動が多い 》

厳しい現実を見ないで、いたずらに古の言葉を引用して教理を教えるような団体が増えている気がします。確かに、古来の教えを守ることは大切ですが、「信仰に生きて実践する」人は、時代も人種も身分も関係なく、人々の心に信仰の芽を根付かせることができる人だと思います。そして、マザーハウスがそうだと思いました。

色々な宗教があり、その中にまた宗派がありますが、結局、「弱い人を救う」といっても、その「弱い人」のうちから救いやすい人を選んで救っているだけ、という団体が多いと感じます。

マザー・テレサは、「どんな重病人でも見捨てずに、救いの手を差し伸べた」と言われていて、偉大な「愛」の実践者だったのだと尊敬しています。

日本でも、このような「愛」を実践した人物がいたことを、今回は多くの皆さまに知っていただきたいと思い、手紙をしました。

明治32年頃から昭和初年にかけての約30年間、愛知県知多半島の丘陵部、鴉根の丘に、「榊原弱者救済所」という民営の施設がありました。

そこに暮らすのは、保護の必要な出獄人、孤児・捨て子、働けないために捨てられた老病者、身障者、帰る家の無い人たちなどで、収容者数は、のべ1万5000人と言われています。

施設の主宰者は、榊原亀三郎という人物です。1868年（明治元年）、知多郡成岩町で、べっ甲細工を営む商家の次男として生まれました。15歳の頃にはヤクザ顔負けの暴れ者となり、べっ甲細工屋の亀三郎ということで、「べっ甲亀」と呼ばれるようになりました。

20歳の頃、知多半島にある博徒組織の傘下として、成岩町に一家を構え、70人もの子分を抱える親分となります。

《 静岡監獄での出会い 》

あるとき、亀三郎は自分の子分たちを見て、「今はヤクザで手の付けられないワルもいるが、生まれたときからそうだったのだろうか」と思いました。

そして、「人は生まれた場所で一生が決まる。城中で生まれれば、若君。大店の座敷なら、生まれたその日から若旦那。貧乏人の土間に生まれた者は、一生、腹を空かして生きるのだ。彼らが人並みに温かい飯を食いたければ、盗人かヤクザになるしか道は無い」と考え、自分にできることを探すため、静岡の浜松に行きました。

浜松でも博徒の中で暮らしていましたが、明治23年初冬、博打場で大暴れをして賭博傷害の罪で逮捕され、懲役2年。静岡監獄に収監されました。

入獄に際し、典獄（現在の刑務所長にあたる）との面接が行われました。当時の典獄は川村矯一郎で、彼自身も静岡監獄に入獄した経歴がありました。

収監中、川村は亀三郎を何度も呼び出し、話を重ね、亀三郎は川村の話に感化されていきました。そして、川村に金原明善という人傑を紹介され、出所後、亀三郎は、川村と金原が設立した「出獄人保護会社」を訪れます。

亀三郎は出獄人保護会社の活動に感心し、しばらく金原の元に滞在して、たくさんのことを学びました。そして数年後、ヤクザを辞め、弱者救済を志します。

《「榊原救済所」開所！》

明治 32 年、粗末ながら「榊原救済所」が開所しました。しかし、開所の式に地元名士の参列は無く、式は惨めなものに終わります。

明治 35 年には、出獄人 11 人、老人 9 人、孤児 12 人、女性 13 人、宿舎の建築に当たる若者 20 人の計 65 人、大正期では、常に 50 ～ 100 人を収容していました。経済的にも逼迫した榊原救済所を救ったのは、名立たる社会事業家たちです。当時の大物たちは、社会事業や日本近代化への情熱が今とは桁違いで、救済事業を視察した人たちはこれに感嘆し、救済所は次々と大物たちから支援を受けるようになります。

しかし、明治時代でも、収容者の社会復帰は簡単ではありません。「元ヤクザ」「前科者」のレッテルは重く、簡単に事は運びません。

そこで亀三郎は、「榊原組合」を設立。「夜学」を設け、救済所の人びとが完全に自立するまで亀三郎の管理下に置いて、雇用主に安心感を与え、多くの人たちが就職できるようにしました。

女性の社会復帰も簡単ではなく、特に、「救済所出身」と言うと、蔑視（当時は女性蔑視も当然の風潮でした）されました。そこで亀三郎は、救済所から自立していく女たちを亀三郎の娘にして自立させました。そのことによって、その地方には亀三郎の娘や妾の子がたくさん生まれたと言います。

幾多の困難にも決してあきらめず、弱い人たちを見捨てることなく、最善の道を探し続け、信念を貫いたのが榊原亀三郎という人物です。弱い人を助けることは困難がたくさんあり、生半可な気持ちではできません。

《 亀三郎についての本 》

榊原亀三郎に関する書籍については、①『いばりんぼうのカメ』（西まさる著、新葉館出版、1296 円）、②『幸せの風を求めて～榊原弱者救済所～改訂版』（西まさる著、新葉館出版、1836 円）が出版されています。

①は児童向けの絵本です。②の書籍には、榊原亀三郎の人生、金原明善や川村嬌一郎の出獄人保護事業、救済所を支えた人たちの活動、明治という時代の風潮、その風潮を変えた人たち、更生を支える人たちの苦労が、よく書かれています。ぜひ、多くの人たちに読んでいただきたいと思います。

刑務所の一面

RS.750

《 刑務所の一面 》

悲しき達磨氏の呟きに、大変な環境に身を置いていると思いました。

刑務官は、受刑者の身の上などを知る立場にあり、他人の知らない個人情報も知っています。色眼鏡で見て、一方的に判断する人もいます。

昔は刑務官の間で、上下関係や派閥、先輩からのいじめなどがあり、平成の初期には、3 年間で 10 人中 3 人しか定着しないほど、厳しい職場でした。そんな中で鍛えられた人が担当になった場合と、いじめを許さない環境に変わってから刑務官になった場合の担当とでは、様々な違いがあります。

受刑者が担当に初期段階から嫌われているときは、受刑者もその担当が嫌いになっていて…。関係改善をするよりも、懲罰になる確立の方が高くなります。

《 身に付けるべきことは 聖書に書かれている 》

刑務所で洗礼を受けられたことは、とてもラッキーなことです。私の所では受けられません。

洗礼を受けた以上、悲しき達磨氏の身に付けるべきことは、聖書にたくさん書かれています。理事長の『人生を変える出会いの力』も読んでみてください。聖書を理屈ではなく、心で読むように、アドバイスも入っています。

社会に通用しないルールを押し付ける刑務所は、収容者の更生よりも、管理運営上の処遇を優先にしている所です。更生を考える刑務所では、洗礼なども受けられ、受刑者への配慮も全く違います。比較すれば問題はたくさん見つかりますが、たぶんそれは不愉快なことばかりです。

聖書とマザーハウスの皆さんとの交流を大切にし、つまらないことで懲罰にならないでください。

《 刑務所での一時の恥を我慢できずに、厳しい社会で生きていけるのか 》

私は、担当に脅されても、挑発されても、冷静に対応しています。少し前ならば、まず無理です。出会いを大切にした生き方のおかげです。

謝って済むなら、一言で済みます。謝りたくないのなら、反論するより、余計なことは言わずに済ませ、どこか（上司、マザーハウスなど）へ相談します。

一時の恥を我慢できずに、社会復帰後の大変厳しい世の中で、どうやって生きていけるのでしょうか。

悲しき達磨さんには、イエスさまがいつも一緒にいます。手紙が書けるのならば、マザーハウスともつながれます。あなたは大丈夫です。刑務所の他の収容者の中には、手紙を出す相手のいない人、味方のいない人もたくさんいます。自分を大切に！

一日の計は、朝にあり

you すず me

《 一年の計は、元旦にあり 》

「一年の計は、元旦にあり」という言葉は、一度は耳にしたことがあるかと思います。簡単に言うと、「一年の計画（目標）は、元旦に決めると良いよー」っていう意味です。この「一年の計は…」というのは、有名な一節ですね。

僕がこの言葉と出会ったのは、去年の春でした。ラジオで紹介されていました。「一年の計は…」と言っているのに対し、「今は4月だしもう遅いじゃん」と僕は思いました。

しかし、知っている人もいるかもしれませんが、この言葉には続きがあったのです。「一年の計は、元旦にあり。一ヶ月の計は、一日（ついたち）にあり。一日の計は、朝にあり」だそうです。元旦じゃなくても良いんだ〜。

皆さんはどんな一年にしますか？僕は…周りを悲しませない、優しい人に…。

人が生きる上で、目的・目標をもつことは、とても重要です。ゴールがハッキリしている人はそこに向かって走れるのですが、ハッキリしていない人は迷ってしまいますよね。

すぐに目標がポンッと出なければ、「半年後、もしくは一ヶ月後にどうなりたいか、何ができるようになっていたいか」でも良いみたいです。

《 良い音霊と言霊を発する 》

もし、目的・目標が見つかったら、声に出した方が良いらしいです。

音霊と言霊というものがあります。音霊は音に宿り、言霊は言葉に宿ります。

音霊は音質で、歌で言うところのメロディーです。良いことを言えば良い音質となり、自分のオーラや周りの雰囲気が良くなります。言霊は人に向かいます。歌で言うところの歌詞です。良い言葉・優しい言葉は、人を包み、勇気を与えます。

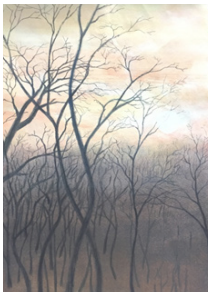
タイムリーな「気づき」

S刑　M・K

《 精神的ケアは、誰でもできる 》

僕は、「スピリチュアル」という言葉にアレルギーをもっています。しきりにその言葉を使う人がテレビに出ていたことが、きっかけなのだろうと思います。「目に見えないものが見える…」と言われても、信じられないタイプです。

『心と魂の叫びに応えて6』を読み始めたときも、そんな固定観念が僕の中で渦巻いていました。その固定観念を打ち破ることなく読み進め、書かれている言葉にピンとくることが一度もありませんでした。



それが、ある日を境に大きく変わりました。

私は、いたって健康で、これまで病気らしい病気も無くやってきたのですが、つい先日、吐血して病舎に入ったのです。原因も分からず、胸が苦しくて、喉が痛くて、食事も液体の栄養剤のみとなり…身体は寒気がするし…異常な速度で唾液が沸いてくるし…。明らかにおかしい状態に陥り、「治るのか」という不安や、「話を聞いてほしい」という思い、焦り等で、気持ちがぐちゃぐちゃになっていました。

そんなとき、ふと『心と魂の叫びに応えて6』が目について、パラパラと読み始めると…多くの言葉が僕の胸に刺さってきました。と同時に、精神的ケアの必要性がよく分かったんです。

僕のちっぽけな病気でこんなにぐちゃぐちゃになってしまうのだから、長い闘病生活をされている方のキツさは計り知れません。

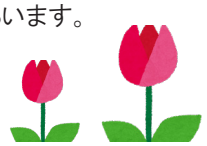
医療的ケアは医者でないとできません。ですが、精神的ケアは、誰でもできるのです。それこそが最も大事だということを学びました。

《 タイムリーな「気づき」》

僕自身、宗教に対しては半信半疑です。二年前は、少信大疑でした（笑）。少しずつ変わってきていると自覚しています。

また、突然病気になったことに対して、「このタイミングで？」と思ったのも事実です。「何か見えない力が…」って考えてしまうぐらい、僕にとってタイムリーでした。あれが無ければ、きっとここまで本の内容に納得することはできませんでした。

まだまだ理解が深まったとは言えませんが、また新たな発見・気づきがあったら、書かせてもらいます。



喧嘩した日は

四目糸草

一、喧嘩した日はコーヒーだ
君は黙って豆を挽く　私は黙って湯を落とす
素敵な香りが部屋に満ち　二人の心は融けて行く
おいしいねって君が言うから
チョコレート出すって私が言えば　いつもの通り仲直り

二、君が欲しい日はコーヒーだ
君は黙って豆を挽く　私は黙って湯を落とす
香りと共に思い出が　二人の心に甦る
あなたが好きって私が言えば
分かっているよって君が言う
ドキドキするような夜が来る

三、雪の降る夜はコーヒーだ
君は黙って豆を挽く　私は黙って湯を落とす
窓のガラスを湯煙が　丸く縁取るこんな夜は
電気を消してキャンドルを　灯したいような雪明かり
町は君と私だけ

風の配達する手紙

服部　剛

今回で、皆さまへの手紙も 3 通目になります。

この手紙を書く前にはいつも、「塀の中のたより」を読んでいます。耳を澄ますと、皆さまの偽りの無い〈人間ノ声〉が聴こえてくる気がします。

そして、この『マザーハウスたより』を通じて、無数の手紙が赤いポストに投函される密かな音は響き――塀の中と、外の人を結ぶ縁（えにし）の糸が視えるのです。

私は、塀の中で過ごす皆さまが、どれほどの言葉にならない想いを胸に日々を生きているか、理解できていると安易には言えません。ですが、最近、ふと日常の風景の中で想うことを、この手紙で分かち合えればと願っています。

私は鏡を見る時、〈私は誰だろうか？〉という、不思議な感覚になることがあり、次に、〈私という人間は世界にたった一人しかいない〉と密かに感じることで、目には見えない小さな希望が、胸の奥に芽生えます。

また、家族といる時も、町を歩く時も、〈この風景は夢かもしれない〉と感じることがあり、〈もし、この一生が夢ならば、今日一日を大切に生きよう〉という気持ちが、生まれてきます。

外の世界で生きている私ですが、「塀の中のたより」を読むと、皆さまが自らの心を静かにみつめる〈本当ノ時間〉の中におられるのを感じ、胸に込み上げるものがあります。

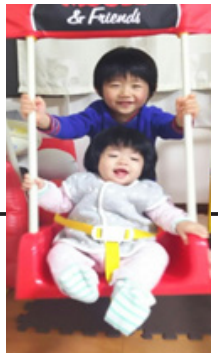
皆さまが日々の中に見出す一輪の花、一杯の水、または聖書の言葉など…には、〈大切な何か〉があるということを、皆さまは誌面から私に語りかけてくれるのです。

さまざまな天気の毎日を歩む皆さまの前に、温かなひとすじの光が射すことを心から祈り、先ほど書いた詩をささやかながら、贈ります。

バナナの色

昨日は　青みがかっていた　バナナが
今日は　黄色く　なっていた

一日で　バナナが　変わるなら
今日の　わたしの　色あいも
一味　変わって　いるかも　しれない



育児日記

I 君が今はまっている遊びは、人差し指で「バンバン」と撃つことです。こちらは撃たれたふりをし、時には倒れます。なぜか、撃っている I 君が倒れるので、救急車のおもちゃをピーポーピーポーと鳴らして、「大丈夫ですか！？」と手当てをします。それを一日に何度も繰り返しています。

先日、I 君が夕食を食べている時にアジの骨が喉に刺さり、救急車で運ばれました。大泣きしながらも救急車の中を見渡し、「ママー、あれなにー、うえ～ん。うんてんしゅさんうんてんしてるよ。うえ～ん」と冷静に観察していました。

骨を取るため、大人 3 人で押さえつけたので泣き喚きましたが、骨が取れるとすぐに元気になりました。実はこれで救急車は 2 回目です。1 回目は、1 歳頃に階段から転倒したときです。どちらも大事に至らなくて、神様に感謝です。

I 君の最近の成長に驚きます。私とKちゃんが先にお風呂から出ても、ずっと一人でおもちゃで遊んでいます。「ママーもうでるー！」と叫び、おもちゃを片付け、自分でタオルで身体を拭き、クリームをつけ、パジャマに着替え、ドライヤーを持ってきて乾かします。「じぶんでできたよー！」と、にこっと笑顔で拍手をし、歌を歌いながら走り回ります。

毎月の『たより』の発送も手伝ってくれます。封を閉めるのはお手の物！途中で飽きると、「ママーたばこいってくるー！」と、当事者さんの真似をします。

妹のKちゃんは、私を探してほふく前進で家中を回っています。見つけると、私の身体に掴まりながら立ちます。360 度どこから見ても可愛いです。よく、お兄ちゃんから不意打ちで激突されたり上に乗っかられて、泣かされています。K ちゃんは強く育つなと思います！

ささきみつお コーナー

あなたは誰の子なのか？

1. ナイアガラの滝の所有者の息子

1908年のある日のこと、小柄な日本人が壮大なナイアガラの滝を見物していると、白人の観光客が、「お前さんはどこの国から来たのかね？」とからかってきた。当時の米国では、黄色人種で背の低い日本人は「ジャップ」と呼ばれ、蔑視されていた。

「私は日本人だ」と答えると、「あの太平洋の向こうの小さな島か。いったいお前さんの島にもこんな滝があるのかね？」と日本をバカにした。

「お前さんこそ何を言っているのか、このナイアガラの滝は私のお父さんのものだ！」という彼の一喝に、「本当か！？」とその白人はたじろいだ。「私の父は、天地万物の所有者である。だから、この滝は私のお父さんのものだ」。その日本人は、当時アメリカ各地で巡回説教をしていた木村清松牧師であった。

その会話が現地の新聞のニュースで、「ナイアガラの滝の所有者の息子来たる！」と、大々的に報道された。その後、木村牧師が説教で招かれた教会は、大入り満員になった。それは、万物の真の所有者は誰なのか、人間の真の父は誰なのかを、アメリカの人々に気づかせることになった。

2. シングルマザーの息子の本当の父親

「君のお父さんは誰なの？」。学校でも、食品店でも、薬局でも、どこへ行ってもこう聞かれて、あるシングルマザーの子どもは、答えられない苦しみで心がいじけていた。

学校では仲間に隠れて一人で昼食をとり、お店にはほとんど行かなくなった。

この少年の通う教会に、新しい牧師が赴任してきた。牧師に父のことを聞かれることを避けるため、彼は日曜の礼拝には遅刻して、終了直前に会衆をすり抜けて教会を出て行った。

「君のお父さんは誰なの？」。ある日、礼拝後すぐに牧師は走って行って、教会を出て行こうとしたその少年の肩を叩いて聞いた。その瞬間、教会全体が死んだように静まり返った。皆の視線が自分に集中したように感じ、少年は怖気づいて返事をしない。

「ちょっと待てよ、私は君をよく知っているよ」。その場の雰囲気からとっさに察した牧師は、「そうだ、君は天地を造られた父なる神の子どもだ！さあ、行って、お父さんのとてつもない財産をもらいなさい！」と言った。

まさに聖霊の働きであった。その言葉に少年は初めて微笑んだ。教会の外に出た彼は、全く変わっていた。自分の本当の父親は誰かということを、心から悟ったのだ。

やがて彼は、テネシー州の知事に当選した。なんと、知事就任式の日は、自分の本当の父を知った日と同じだった。

3. すべての人の完全な父

聖書によれば、原罪をもって生まれたすべての人は、父なる神を見失った霊的な孤児である。私を含め、この世の父は天の父の不完全な代役にすぎない。

私にとって今は亡き父は、頑健でたくましい働き者で、温情がありとても頼りがいがあったが、非常に几帳面な性格であった。何事にもルーズな私は父に叱られるのを恐れて、できるだけ近寄らないようにしていた。たまに会っても緊張感があり、ぎくしゃくとした会話しかできなかった。

しかし、キリストを信じて出会った天の父との間では、いつでもどこでも自由に会話し、恵まれたときは感謝し、嬉しいときは賛美し、悩みのときは知恵をもらい、困ったときは助けてもらい、上手くいったときは誉めてもらい、失敗したときは慰めてもらい、失望したときは励ましてもらっている。

時に厳しい訓練を受けることがあるが、それによって、愛と希望をもって、強く正しく生きるように成長させてくださっている。天の父は、私にとって完全な父である。

立命館大学
講演後アンケート（前半）

＊一部抜粋・編集させていただきました。

助けが必要なら、同じように救いの手を差し伸べる

「罪を犯した者は『反省』するのではなく、自分の罪を『悔い改める』ことで初めて、自分と本当の意味で向き合い、自分の犯した罪の重さを理解できる」という言葉の深さを感じました。

受刑者が本当の意味で自分の罪を重く受け止め、二度と過ちを繰り返さないよう、悔い改める機会をしっかり設けてあげることこそが、何よりもまずは重要なことであると思いました。

また、刑務所内の改善点について、「受刑者たちの心の声を吐き出せる場を設けるべきだ」とおっしゃっていました。全くもってその通りだと思います。心の弱っている人、ましてや受刑者の方の中には、精神状態が穏やかでない人もいるでしょう。そんな方々の心のケアをしてあげ、胸の内に溜め込んだ気持ちを少しでも吐き出させる場所をつくることは、急務であると考えます。

今回のお話を聴く中で、どんな人間であれ同じように接し、助けが必要なら同じように救いの手を差し伸べることが、再犯防止に繋がるのではないかと考えるようになりました。

犯罪者との境界は紙一重

規律でガチガチに固めなければ保てない秩序も、刑務所内にはあるのだろうが、受刑者の内面が変わる見込みの無い体制下で数年を過ごさせ、社会にそのまま戻していくような形式的な流れに、どれほどの意味があるのか、ということを改めて問い直されているように感じる。

また、「無償の愛」というものを強調されていたが、将来的に犯罪者を生まないため、全ての人に必要なのは究極的にはそれなのだろう、と強く同感した。

その点を考えると、自分はたまたま、特に大きな問題も無い家庭に生まれてきたからこそ、犯罪への一線を越えて来なかったに過ぎず、自分を受け入れ、育ててくれる人に出会えていなかったらと思うと、ますます、犯罪者との境界は紙一重なのではないかと思った。

被害者の傷と加害者の再出発

ニュースから得られる受刑者の情報は、その人の一部でしかないのだと感じた。罪を犯した者の過去の家庭環境やトラウマ、幼い頃から蓄積してきた諦めや不安など、罪を犯した背景に何があるのかを知らなければ、ただただ厳しい処罰をしても、本当の意味で更生させることなどできないのだと知った。

「人は人によって変わる」という言葉があったが、受刑者にとって、社会復帰を目指す上で、誰かに必要とされることや手を差し伸べてくれる人の存在を感じられることが、最も必要であると思う。

一方で、被害者のことを考えると、どうすることが両者にとって一番良いのか分からないのも、正直な気持ちである。

講演を聴いて、受刑者の過去の傷を知り、社会復帰できるよう支援することは重要なことであると感じた。しかし、自分自身が傷つけられたり、大切な人を奪われたりしたとき、厳罰化や死刑を望むことは当たり前だと感じてしまう。加害者の過去がどう犯行に影響しようと、失ったものが戻ってくることは無い。

被害者の傷と、受刑者の再出発、どちらも大切なことであるからこそ、難しい問題だと考えた。

受刑者の存在意義を認める

五十嵐さんが、作業効率を上げるために軍手にハンカチを入れたところ、職員から「余計なことをするな」と言われ、懲罰を受けた、というお話がありました。それは、受刑者の創意工夫を否定し、人間的な思考を停止させるものだと考えます。

刑務所での常識は社会の非常識であると感じました。私は、社会に戻って通用する常識や知識を受刑者に教えることが、刑務所の役割ではないかと思います。

「反省は一人でもできるが、更生は一人ではできない」という言葉を聞いて、改めて、更生には社会からの支援が必要不可欠であると分かりました。「依存の反対は健常ではなく、孤独である」という言葉を聞いて、納得しました。

これまでの授業で、「犯罪をする人は自発的に犯罪をするのではなく、家庭環境が良くなかったり、心に闇を抱えたりしていることが多く、社会的な要因によって犯罪をしてしまう場合も少なくない」、と学びました。私は、受刑者の存在意義を認めることこそ、社会復帰の第一歩になると考えています。

孤独にならない環境づくり

クレプトマニアの人たちに対する接し方として、「ただ寄り添えばいい。不満や不安を聞いてあげればいい」というのは、とても良い接し方だなと思いました。

彼らは、親や周りの人たちに見てほしいから、悪さをします。私としては、実感が湧かないので共感できないですが、話を聴いていて、そのように考えて行動する人もいるのかと納得しました。

人とのつながりがあれば、人はまっすぐ生きていけます。そんな社会から、今は遠ざかっているように思えます。社会でも孤独、刑務所内でも孤独では、その人は再び犯罪をしてしまうのではないでしょうか。社会でも刑務所内でも、孤独にならないような環境づくりをすべきだと感じました。

人とのコミュニケーションによって、社会性を取り戻す

刑務所の根本的な問題について考えさせられました。

刑務所が快適な場所であるべきとは言いませんが、少なくとも、自分の犯した罪について考え直すことができ、社会に復帰することが容易になるような環境にするべきだと感じました。

そのためには、人とのコミュニケーションが必要不可欠だと思います。受刑者同士や、受刑者と刑務所職員との間でコミュニケーションが図られることで、受刑者は社会性を取り戻し、それが再犯を防ぐことにつながると思うからです。

被害者を生み出しているのは、犯罪者だけの問題ではなく、今のシステムの問題だということに政府が気づき、制度が見直されていくことが必要だと感じました。

また、社会に出てからの支援も必要で、犯罪をした元の環境に戻らなくても済むように、受刑者の居場所となる施設や団体を整備するべきだと思いました。

ありのままに話せる場

五十嵐さんは、「殺人と薬物以外の犯罪に手を染め、過去に 3 回、刑務所に入った」とおっしゃっていたが、そのような印象を全く感じず、罪を犯した人も一人の人間であるのだ、と改めて感じた。

受刑者は過酷な環境に身を置いていると感じた。刑務官も、1 人あたり 50 人以上の受刑者を担当するとのことから、受刑者が更生に至るのは並大抵の道ではないと分かった。

受刑者が、自分の心を許せる他者を見つけ、人生で起こったことをありのままに話すことができる場を得るなどすれば、改心のきっかけを生み出すことができるのではないかと思った。

自分を変えるのは自分自身

受刑者が自分の気持ちを伝える場所、自分の気持ちと向き合える場所の設置は必須であると感じた。

受刑者は社会から隔絶された環境の中で生活していくため、常に孤独感を味わうことを余儀なくされるということが、今回の話を聴いて分かった。

更生のできる人、できない人の分かれ目が「自分を変えよう」と思うかどうか、ということは、更生に限らず多くのことに言えることだと思った。やはり自分を変えるのは、最終的に自分自身なのだと分かった。

一人の人間として

受刑者に対して、最初から偏見の目を持ってしまうのではなく、一人の人間として向きあっていくべきだと思いました。これは、受刑者に限らず、これからの人生においてたくさんの人と出会っていく上で、非常に重要だと思いました。

更生するために自分でも努力をしていたか

犯罪学の授業や、今回のお話にもありましたが、確かに「環境」というのはその人個人の人格形成に重要な要素となり得るものであり、その「環境」に起因して犯罪を起こす人もいると思います。

しかし、いくら「環境」を整えたところで、「更生」や「反省」はその人自身が自発的にやらなければ意味が無いと思いますし、五十嵐さんもおっしゃっていましたが、「更生」と「甘え」は違うと思います。

現代における刑事司法制度は、更生を促す環境として不十分であるとは思いますが、正直、「環境のせいで更生ができなかった」と言い訳をする人たちは、本当に更生するために自分でも努力をしていたのだろうかと考えてしまいます。「社会や制度に、おんぶにだっこで寄りかかるだけで更生できる」、などと考えている人がいるならば、それは完全に「甘え」だと思います。

自分を変えなければいけない

「自分を変えなければいけない」という言葉がとても印象に残りました。自分を変えたいということは、元受刑者の人が二度と刑務所に入らないようにするためにも必要なことですが、私は自分自身に向けられた言葉のように感じました。

マザーハウスの活動がもっと広まって、前科者にとって居心地の良い社会になればいいなと思います。

言葉にできない弱みや依存

犯罪者であろうと私たちと同じ普通の人間であるから、特別視せずに、気持ちに寄り添うことが大切であると思った。犯罪者の中にある、言葉にできない弱みや依存から救う環境を整える必要があると思った。

犯罪は許してはならないが、犯罪者を弾劾するのではなく、これからの人生をより良くするためのサポートをしなければならない。

言いたいことを言える私たちが、声を上げなければならない

受刑者の中には、更生する気が全く無い人もいるかもしれませんが、「更生したい」「変わりたい」と心から思っている人もいます。そう思っている人の希望を、今の刑務所は絶望に変えてしまっている気がします。

「人は、人の温かさに救われる」とどこかで聞いたことがあります。罰を与えているだけでは何も変わりません。それどころか、新しい憎しみを増やすことにもなりかねません。五十嵐さんは、「マザー・テレサとの出会いで変わった」とおっしゃっていました。人は、人との出会いで変わることができます。

行動を厳しく制限され、言いたいことも言えないのは本当につらいことです。言いたいことを言える私たちが声を上げ、日本の刑事司法制度を変えていかなければならない、と強く思いました。

相手を思いやる少しの優しさ

逮捕された被疑者の、その後を知ろうとする人はほとんどいないと思います。しかし、出所した彼らを、私たち社会は受け入れていく必要があります。

五十嵐さんは「無償の愛」という言葉を何回もおっしゃっていました。無償の愛を他人に与えることはとても難しいことです。でも、「もし自分があの人の立場（境遇）だったら、犯罪をしなかったと言い切れるだろうか」と、相手を思いやる少しの優しさで、救われる人もいると思います。

両親に感謝の想いを伝えたい

両親の注目を引くために、窃盗を犯してしまう人がいることに驚きました。それだけ、親が子に与える影響も大きいのだと思いました。自分も結婚し、子供をもつ機会があったならば、自分の行動が子供に与える影響の大きさを自覚して育てようと思います。

また、両親に感謝の想いを伝えたいと思いました。

「愛されている」「必要とされている」という実感

「刑務所ではとても孤独で、『愛されている』『必要とされている』と実感できない」、とおっしゃっていました。

普段の生活でも、自分が必要とされているということが実感できる場面は、あまりないと思います。「自分はいてもいなくてもどちらでも良いんじゃないか」と考えて無気力になり、犯罪に手を染めたり、自殺したりする方もおり、「愛されている」「必要とされている」という実感を得ることが、犯罪防止や更生にもつながると感じました。

犯罪者に対する見方そのものから変えていかなければならない

私は、海外の番組や資料、ドキュメント映画などで、海外の刑務所事情については色んなものを見てきたが、改めて、日本の刑務所での処遇は非道なものであると考えさせられる。国民性としても、日本では、前科者に対する排斥の感情が群を抜いて強いように思う。

我々が「犯罪を減らしたい」と願うならば、まず、犯罪者に対する見方そのものから変えていかなければならない、と強く感じた。

誰にでも間違える可能性がある

今まで私は、自分が犯罪者になることなんて絶対にあり得ないし、犯罪をした人をどこか特別な人、と認識していたが、その考え方が変化した。

犯罪をしてしまう要因は環境にある。自分は家庭的に恵まれており、虐待などを受けたことが無く、友達もいるため、決して孤独ではない。しかし世の中には、虐待、育児放棄、いじめなどにより、自身を孤独であると思い、欲望を満たすために犯罪に走ってしまう人がいる。これから犯罪学を学ぶ上でも、改めて、受刑者にはこのような背景があることを頭に置いて学んでいきたい。

人は間違えてしまうこともあり、それは特別なことではなく、誰にでもその可能性がある。だからこそ、一度道を踏み外してしまった人を特別な目で見るのではなく、その人がもう一度やり直せるような社会をつくることが大切だと思った。

死刑について

「受刑者」「犯罪者」と一括りにするのではなく、同じ人として理解することが重要であると感じました。

死刑に関して、「人が人を裁くことに絶対は無く、現に、冤罪で罪の無い人を殺すことや、『自分が死にたくても自殺できないから、国に殺してもらおう』という考えをもつ人まで現れている現状から、死刑が抑止力になっているとは断言できない」、とおっしゃっていました。

私もニュースで、殺人を犯した動機として、「特に理由が無かった」「誰でも良かった」（主に通り魔など）という発言が出るのは、その人の奥底に、死にたくても死に切れない思いがあるからなのではと思っていたので、死刑は終身刑に代わるものと考えて、廃止されて良いと思います。

社会復帰を重視した制度への移行

厳格なルールを定めて更生させる、という日本の体育会的発想は、ノルウェーなどの国が掲げる、社会復帰を第一とした刑事司法制度よりも、明らかに再犯防止効果が少ないです。

同じだけの税金がかかるならば、社会復帰を重視した制度への移行をするべきであると感じました。

実践していきたい

冒頭で、「自分が盗んでいないのに、周りから悪者扱いをされ、結果的に悪さをするようになった」と話されていたが、当時、味方になってあげる人や、疑った人たちが謝罪をしていたら、変わっていたかもしれないと感じた。

「前科者だから」と偏見の目で見るのは良くないことだが、私自身、その場にいたなら色眼鏡で見てしまうと思う。しかしながら、今回の講話によって、誠実に向き合い、かつ、上から目線ではなく寄り添ってあげることが大切であることを学んだので、できる範囲で実践していきたい。

ご寄付ありがとうございます！！

12月17日～1月15日の寄付金

計　489,825円

行事予定

▼2/9　18:30～20:30　立正大学にて、
第4回APS（アフター・プリズン・サポート）研究会

▼2/18　14:00～17:00
聖イグナチオ教会内　岐部ホール404号室にて、
VIPプリズム「少年問題について」

▼2/28　18:00～20:00　龍谷大学にて、
第5回APS研究会

編集後記

皆さま、『マザーハウスたより』を読んでくださり、ありがとうございます。

受刑者の方からの年賀状が編集局の方にも何通か届き、嬉しかったです！ありがとうございました。

今月号のテーマはずばり、「ぎゅうぎゅう詰め」です！久々に文章・イラストの配置に苦労しました！パズルのピースをはめるみたいに、「ああ～！この4行が無ければ上手くいくのに！！」「この文章をこっちに入れれば…よし！ぴったり！」という作業を何度も繰り返しました。

無事に完成して一安心です！

さて、「受刑者が問いを発して、社会の人が答えを返す」という方式を取り入れてほしい、とご要望がありました。

現状、「塀の中のたより」では、受刑者の方の文章に対して、別の受刑者の方が感想や意見を書く、ということも多々あるので、同じことを「出所者／社会の声」コーナーでもできればと考えております。

下記の方法でしたら、『たより』で社会とのキャッチボールができるかなと思うのですが、どうでしょうか。

・出所者／社会の人全般への質問がある方
→「出所者／社会の人に○○という質問をしてほしい」と、**編集局宛の**お手紙に書いてください。

・すでにコーナーで登場した方への質問がある方
→「○月号の○○さんに追加でこんな質問をしてほしい」と、**編集局宛の**お手紙に書いてください。

注意：**必ず「編集局宛」で出すか、お手紙の中に「編集局に回してください」と明記してください。**

また、「作品を売買してほしい」という内容のお手紙が事務局にときどき届くのですが、「利益をマザーハウスに寄付したい」というご要望も含め、**マザーハウスでは売買のご依頼には対応できません。**ご了承ください。

それでは、来月号もお楽しみに！

マザーハウスたより 編集局

定期的にコーヒーを購入し、販売してくださっている教会・修道会（順不同）

＼ こちらでもお求めになれます。／

カトリック茅ヶ崎教会
カトリック北仙台教会
カトリック所沢教会
カトリック中和田教会
カトリック布池教会
カトリック東山教会
カトリック浜松教会
カトリック新子安教会
カトリック菊名教会
カトリック碑文谷教会
カトリック東仙台教会
イエズス会日本殉教者修道院
カトリック足利教会
カトリック神田教会
カトリック松戸教会
日本カトリック神学院
カトリック戸塚教会
カトリック桃山教会
（平和環境部）
カトリック多摩教会
カトリック西千葉教会
カトリック下井草教会
カトリック元寺小路教会
ドン・ボスコ社

ご協力ありがとうございます

マザーハウス×きしゃぽん古本募金

書籍・DVDを寄付していただくと古本募金になりマザーハウスに還元されます。詳細はマザーハウス×きしゃぽん係にお問い合わせください。

TEL 0120-29-7000
送り先 〒 358-0053
埼玉県入間市仏子 916

便利屋サービス《ラウレンシオ》

良心的価格で不用品処理、遺品整理、掃除などを真心こめてさせていただきます！もちろんお見積もりは無料です。この事業は「出所者の就労支援事業」の一環でさせていただいております。収益の一部は、出所者の更生改善と社会復帰支援事業に充てられます。

連絡先 080-3729-0067
FAX 03-6659-5270
MAIL lawrance@motherhouse-jp.org

★ラウレンシオとは３世紀にスペインで生まれ、料理、掃除等の下働きの中に神の臨在を見、歓喜した聖人。

ルワンダ・コーヒーの栽培は、1,300 ～ 2,200 メートルの高地栽培、昼夜の寒暖差と豊富な雨量に恵まれた天候、肥沃な火山灰質の土壌、パーフェクトな生産環境で天塩に掛けて有機肥料を使用した栽培で行われています。豆は手で収穫され、完全洗浄、天日乾燥を経て、一粒、一粒、手で選別されます。それらの丁寧な作業が、ルワンダの大粒で美しいグリーンビーンズ（生豆）“ アラビカ種ブルボンマヤゲイス ” を生みだしています。

社会貢献

この商品は全て出所者が製造から販売に携わっており、収益金は全て受刑者の更生と出所者の社会復帰支援及び施設建設資金等に使用させて頂きます。

マリアコーヒー購入について

ご購入の申し込みやお問い合わせは Fax、メールにてお受けいたします。

送料別

- 200g［粉・豆］……¥900
- カフェドリップ（一人用）10g ……¥100

FAX 03-6659-5270
MAIL maria_coffee@motherhouse-jp.org

マザーハウスへのご支援は下記の通りです。

★ 郵便振替口座　00170-0-586722
★ みずほ銀行 新宿支店 普通口座 2376980
口座名：特定非営利活動法人 マザーハウス
トクヒ）マザーハウス

- 正会員年会費 …… ¥5,000 × 1 口
- 賛助会員 …… ¥3,000 × 1 口
- テレサの愛の基金（出所者の社会復帰支援）…… 寄付

―マザーハウスたより２月号 ―

発行責任者／五十嵐 弘志　2017 年 2 月 15 日発行

〒 130-0024 東京都墨田区菊川 1-16-17-102

info@motherhouse-jp.org
http://www.motherhouse-jp.org
https://www.facebook.com/v.t.nicolas
http://www.facebook.com/motherhouse1964

TEL 03-6659-5260